

近畿地方の万葉集と風景画シリーズ（第四十二回）

しまの
みや
「嶋宮」

まがり

島の宮 勾の池の 放ち鳥 人目に恋

はな

かづ

ひて 池に潜かず

作者…柿本人麻呂（巻二—170）

（解説）島の宮のまがりの池の放ち鳥も、人目恋い慕って池に潜ろうともしない。

・「島の宮」は奈良県中央部の明日香村に飛鳥時代の豪族であった蘇我馬子の墓に比定されている石舞台古墳の西方に広がる島庄遺跡しまのしょういせきで石張りの方形（正方形）池や石組水路が出土している。

・さらに、この池の南側では大規模な建物群が7世紀全般にわたって建てられており7世紀の前半・中頃・後半と変遷がみられることから時の豪族・蘇我馬子時代の邸宅・嶋宮時代と重なることから有力な候補地とされている。（明日香村発
行・飛鳥の宮殿等参照）

・その蘇我宗家の没落後、その跡地が天皇の離宮となり「嶋宮」と呼ばれた。のちに天武天皇と皇后・持統天皇の子で有

力な皇位継承者といわれていた草壁皇子の宮くさかべのみことなったと考えられている。

・草壁皇子は持統天皇三（六八九）年四月、皇位継承すること
が、人々に心待ちにされていたが二十八歳という若さでこの
世を去っている。

・この歌の解説を万葉学者・中西進氏が「万葉塾」（朝日新聞
掲載）で次のように推測し記述している。

「・草壁皇子が亡くなり、あわただしく悲しみの闇が生前の宮
殿を包む。今の明日香村の山沿いにあった宮殿・嶋宮には、
川の水を引き込んだ池が作られていました。しかも中国風の
曲がりくねった曲水の池でそれを人々は勾まがりの池と呼んでい
ました。その形は勾玉まがたまを連想させたようです。その池に皇子
は鳥を放し飼いにして、かわいがっていたようです。鳥はカ
モかもしれない。カモは雄雌とても仲の良い鳥です。あるい
はカイツブリとも考えられます。この鳥は水に潜もぐることで有
名です。ところが鳥たちは泳ぎまわりもしません、冷たい悲
しみの涙で、凍りついてしまったのでしょうか。きっと池の
岸に現れる皇太子を一目見たいと思っっているのだと思う。」
と記す。



(写生地) 石舞台古墳北側の小高い丘に立地する明日香村上じょう
居ごから草壁皇子の嶋宮にあつた池が見つかった地とされている
明日香村島庄しまのしょうの集落と遠くに奈良県と大阪府にまたがる
二上山にじょうざんと葛城山連峰かつらぎやまれんぽうを描く。(池田杏花)